

ラオスの こども通信

62号
2014年12月発行

発行：(認定)特定非営利活動法人 ラオスのこども

- 多彩な文化、地域の暮らしを本にしよう。▶ p.1
- はじめる・つながる・つくりだす [2014.7-2014.11]
ラオス発 ▶ p.2 日本発 ▶ p.3
- みんなでボランティア ▶ p.4
- 総会・認定NPOの報告 ▶ p.4
- メコンのほitori「衣」 ▶ p.4



写真の説明はp4をごらんください。

多彩な文化、地域の暮らしを本にしよう。

モン、クム(カム)、黒タイなど数十の民族が多彩な文化を持つのがラオスです。それぞれの文化を自ら発信する担い手の登場をめざして作家育成セミナーを開催。様々な民族の若手による27作品ができあがりました。

ラオス全国から、多様な民族の若手が参加

ラオスでの読書の普及をめざし、小中学校を中心に学校図書室の開設と継続的な支援を続けている当会は、本の作り手を育成する取り組みを繰り返し実施しています。なぜなら、ラオスでは、今も本そのものが身の回りにほとんどない状況があるからです。そのため、学校図書室を開設すると同時に、当会は民話、創作絵本、辞書など様々な本の出版を進めています。それには作り手の育成・発掘が欠かせません。

2014年8月と11月、当会はヴィエンチャンで「ラオスの各民族の若者のための出版研修」を行いました。ラオス全国に情報文化観光省と教育スポーツ省の協力を得て参加を呼びかけ、文化紹介記事を執筆して提出することを応募条件に募集したところ、ラオス全17都県中10県から25人が参加しました。モン、クム(カム)、黒タイ、白モン、プアン、カトゥなど少数民族が約6割というバラエティ豊かな研修となりました。

村の人からの聞き取りこそ第一の情報源

地域の文化を記録・出版するにあたり、講師のヴィエンマラ・ヴァムア(ラオス大学准教授)さんは、今日、2種類の情報源があることを参加者に思い起こさせ、

「村の人からの聞き取り、伝承、自分の目で見たこと、それが第一の情報源。みなさんは、これを豊かに持っています。二つ目が出版物やウェブ。ラオスにはこれが不足しています」とした上で、「第一の情報源から集め、しっかり理解して、第二の情報源に変換して次世代に送る。その担い手がみなさんです」と訴えかけました。

文章表現とともに、写真家、イラストレーターの講師も加わり、「一点の写真は、千の言葉以上に語る」「イラストは、写真でも言葉でも示せない詳細を伝える」ことを強調しました。さらに、編集、本づくりの基本を学びました。



写真撮影の講習
(ヴィエンチャン都子どもセンター)



撮影した食材。セコン県のスウィ族の名物料理「ラムポイ」。竹に入れて焼く。

ラオスは多様な民族がそれぞれの言語を持っていますが、学校教育も出版物もラオ語(ラオス語)を用います。今日、急速に開発が進み、商品経済が浸透する中で、民族の文化は危機に晒されている現状があります。当会スタッフのスックパンサーは、「若者が自らの文化を再認識し、発信をしていくことは、地域の人々の自信、自尊心の強い支えとなる」と、研修の意義を語ります。各参加者は地域に戻って、学んだ技術を伝える役目を果たします。

今回の研修は、当会ラオス事務所が立案し、スイス政府のラオス文化チャレンジ基金による支援を得て実施しました。

(スックパンサー/ラオス事務所、森透/理事)



ルアンナムター県からの参加者が村の暮らし、釣りをしている様子を描く。

ラオス 発

その地域の作者ならではの眼差しで。

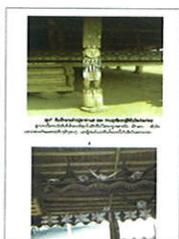
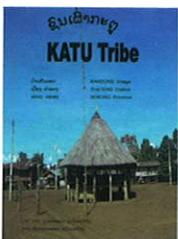
研修の成果を出版しよう

多様な民族文化をそれぞれの地域の若手が本にする「ラオスの各民族の若者のための出版研修」からは27作品が生まれました。料理、祭り、歴史、暮らし、生活信条や価値観など、その地域で生まれ育った作者ならではの眼差しで描かれています。

当会は、これらを出版にまでもっていかうと準備を進めています。例えば、南部セコン県のカトゥ族の参加者は村の中心にある神社のような建物で村の寄合・祭り・来客者用に使う「クアン」を紹介しています。その中には木彫りの彫刻があり、ケーンの演奏に合わせて祈る姿が彫られ、蛇の彫刻を彫った庇もあります。

また、北部ボケオ県からのモン族の参加者は、地域の人々が心を一つにする祭礼、家畜を食するまでなどをまとめています。

その参加者は、「自分が住む地域の図書室や店で売っているのは、首都のヴィエンチャンの人が書いた本ばかり。地元の人間が書いた本も並べられたらと、そんな気持ちで作りました」と思いを語ります。実際、その土地の人が我が文化を本にまとめ、それが全国各地で行われるというのは初めてでしょう。



<左>セコン県カトゥ族の参加者の作(表紙)

<右>建物の内部には蛇の彫刻が施されている

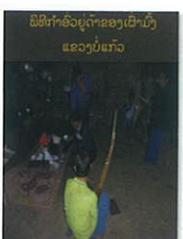
地域の図書室で読まれてこそ

小中学校の教育現場での図書活動が活発に行われるには、先生がどれだけ意欲があるのかがカギです。身近な事、そして他地域の異なる文化の紹介は、子どもたちに読書をすすめる先生の気持ちにも働きかけることでしょ。

また当会では新たに、学校だけでなく、地域に根ざす図書活動を取り組み始めています。「町なかの一角に設けられた図書室に、その地域の人々の暮らしを描いた1冊があれば、本に馴染みのなかった人々にも親しまれるでしょう」と、プロジェクトを進めてきたスックパンサーは、期待を寄せます。

現在、「祭礼」「食」をテーマに2作品の出版を計画中で、さらに資金を集め、優秀作を世に送り出していくことを当会はめざしています。

(スックパンサー／ラオス事務所、森透／理事)



<左>ボケオ県のモン族の参加者の作(表紙)。先祖に感謝の祈りを捧げる

<右>イベントの準備

<出版プロジェクト>

『ラオス折り紙ハンドブック』(原題:くまのパイとおりがみ)

作:ミーパイ

部数:3600部

「子どもたちに折り紙を教えたい!」そんな先生方の声をきき、ラオス事務所スタッフが出版を企画しました。ラオス語の折り紙の本はごく僅かで、各学校には行き渡りません。事務所併設の図書館には、ご寄付の日本語や英語の本がありますが、子どもたちは図を見ながら折っていて、途中説明が読めずに困っている姿をよくみかけます。

作者は、教員養成校の幼稚園課の先生。作るからには「オリジナル」を目指し、紙を三角にしたり、ラオスで身近な動植物を入れたり工夫を重ねていました。また、原稿をみながらラオスと日本のスタッフが折ってみて、わかりやすい表記となるよう協力しました。

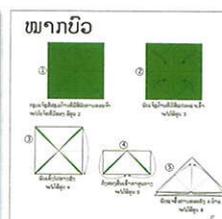
本には100枚の折り紙セットを付けました。身近に折り紙が売っていない地域でもすぐに使えると大好評です。

完成した本を小学校に持って行くと、まず先生が釘付けになり、「あー、こういうのが欲しかった。ありがとう!これ一冊しかないの?」という嬉しい反応が届いています。

支援:学習院女子大学(2,200部) キヤノン株式会社(1,400部)



表紙



ハスの実①



ハスの実②

わたしたちはラオスで、こうして出版する

本づくりから学校図書室・図書館に届けるまで、こんなふうにして進めます。

①原稿をあつめる

- ・コンクールや研修を実施し、優秀作品を選ぶ
- ・企画をたてて、適した作者を探して、原稿を書いてもらう
- ・作者本人による事務所への持ち込み
- ・海外作品の翻訳(翻訳者を探して、依頼)

②原稿が文章のみの場合、ストーリーに合わせた挿絵を依頼、写真を集める

③文章や絵のチェック

ラオス語の文章表現は、ラオスの作家であり会のアドバイザーである方々が確認。必要に応じて絵や文章の修正を作者に依頼する。作者が専業でないこともあり、修正作業に時間がかかる。まれに修正に同意せず、出版をやめる場合もあり。

④絵や写真と文章をレイアウトし、印刷原稿を作る

専門の技術者へ依頼。簡単なものはスタッフがする場合も。

⑤スポンサーにロゴや支援者名の記載を確認

⑥情報文化観光省出版局に出版許可を申請

⑦印刷の見積をとり、印刷所に依頼

⑧完成した本がラオス事務所に納品される

⑨全国の学校や公共図書館に配付

販売可能な本は、契約書店に委託したり、イベントなどでスタッフが販売する。

日本発

<出版プロジェクト>

『絵本はだしのゲン』ラオス語版

作・絵：中沢啓治

訳：チャントソン インタヴォン

部数：3000部

漫画家の中沢啓治さんが広島での被爆体験を基に描いた『はだしのゲン』。約20か国語に訳され、世界で読み継がれている漫画です。2012年に自治労広島県本部からのご提案で、絵本版(1980年刊行)をラオス語に翻訳し出版することにしました。

計画当初、ラオスで出版許可を得られるか心配だったことから、まずは、日本語版をラオス情報文化観光省の出版許可担当に見せました。返事は「残酷なページをカットすれば出版許可できる」。もちろん絵をカットするなどできません。ラオス国立図書館の元館長から、この本の内容について説明していただき、担当者には何とか理解を得られました。

絵本といっても文章量は多く、翻訳やその校正作業には大変時間がかかり、予定期間をオーバーしました。正式な出版許可手続きも通常期間の4倍かかり、様々なアクシデントを乗り越え、2年かかりでようやく完成できました。

日本では2013年に学校図書館で自由に閲覧できない閉架とし、教員が教材として使用するとした自治体があります。ラオスの子どもたちは、この作品をどう受け止めたでしょうか。ラオス事務所スタッフのチャンシー(併設の子ども図書館担当)は、こう言っています。「大人たちが気にかけているのは描写の残酷さですが、子どもたちは別の受け止め方をしています。怖がるよりも、日本でこんなことがあったなんて信じられない!と、日本のイメージとのギャップに驚いている様子です」『はだしのゲン』を子どもたちにどのように伝えるのか、私たちは新たな課題を子どもたちから投げかけられています。

支援：自治労広島県本部 (赤井朱子/東京事務所)



団体・企業からの指定プロジェクトの進行状況

- ◆株式会社ファンケル
「フェアトレードフーズ」寄付金による当会ラオス事務所併設図書館の運営支援。
- ◆公益財団法人ベルマーク教育助成財団
学校図書室開設プロジェクト。既設図書室のフォローアップとして図書セット配付中。
- ◆株式会社すかいらーく
子ども向けラオス語図書5作品の出版。再版3作品の編集完了、新作2作品の原稿準備中。
- ◆沖電気工業株式会社
チャムバスック県の学校図書室1校の開設準備中。

※敬称略・事業開始順。これらは記事掲載以外のプロジェクトです。個人のみなさまからいただいたご寄付は別紙に記載していますので、ご覧ください。

手作りおもちゃ、サプライズの石けん

東京の女子美術大学付属高等学校の3年生の力作が2014年秋、ラオス事務所に届きました。「でんでん太鼓」「凧」「手ぬぐい」「球形の石けん」、そしてそれぞれの遊び方を図解した説明書。ウェブでラオス語を調べながら書き入れました。全部で9セット。「ラオスの子どもたちが楽しんで遊ぶ中で、日本の文化に触れて少しでも興味をもってもらえたら」という思いとともに作った、とのこと。

ラオス事務所の図書館で、子どもたちはまず、でんでん太鼓に飛びつきました。いっぺんに鳴らすととても賑やかですが、1つを残し、他の児童館や学校に届けられます。スタッフは「本を読む前に手をきれいにしようね」と、石けんを図書館利用マナー向上のツールとして活用し、子どもたちも手洗い励行しています。



でんでんでんでん! でんでん太鼓!
(ラオス事務所子ども図書館)



本を読む前に石けんで手を洗う
(ラオス事務所子ども図書館の庭)

作った生徒の皆さんに聞くと、「太鼓は、いい音が出るようにと紙を何種類も試して吟味しました。遊んでいて壊れない頑丈なものかどうしたらできるか、危険性はないかなど考えながら作りました」「凧は、一つひとつ飛ばしてみ調整しながら、よく飛ぶものをラオスに送りました」「手ぬぐいは型染めです。金魚の絵が型どおりに浮かび上がるように色の濃淡にこだわりました」「石けんは固形石鹸を細かくしました。湯せんに根気がいり、ちょっとしたことで埃が入るので衛生面も気を配りました。中にはおもちゃカプセルを入れました」とのこと。一つひとつ、とても丁寧に仕上げられています。子どもたちは手洗い習慣がついたところ、ちょっとしたサプライズが待っています。(森透/理事)

大阪、箕面で特別賞を受賞

ラオスから応募した創作紙芝居「スックおじさん」が、第24回箕面手づくり紙芝居コンクールで7月12日、みごと特別賞(一般の部)「大阪国際児童文学振興財団賞」を受賞しました。お話は10代の学生がつくり、イラストは20代の社会人が描きました。動物たちが次々と川に落ちてしまい、スックおじさんに助けを求めます。「ここだよ! 木の下だよ~!」「何の木かな?」「マンゴーの木!」など、演技手と聞き手とで問いかけて答えのやりとりをしながら進んでいく楽しいストーリーです。そして、みんな無事に岸に上がって仲良く帰りましたとき。



審査員からは、「ラオスらしい果物や作物などが出てきて、面白い」「イラストも丁寧で、お話にまとまりもある」などうれしいコメントをいただきました。

(尾澤美春/東京事務所)

みんなでボランティア

末永く続く関係を

嶋田陽介さん（サポーター会員）

2013年のピーマイ（ラオスの正月）パーティーへの参加をきっかけに、私はラオスのこどものイベントに参加するようになりました。その後、東南アジアの国に興味を持ちはじめ、2014年7月に初めてラオスを訪れ、現地事務所で、貸出しカードを入れる袋を本に糊付けするお手伝いをしました。たった1日でしたが、現地スタッフのみなさんと楽しく作業ができて、とてもうれしかったです。



ピーマイに初めて参加するよりも前から、周りの人々にラオスはとてもよいところだと聞いていました。訪れてみると、本当に人々は優しく親切で、のんびりおだやかな時間の流れにすぐ魅了されました。

私はインターネットを活用した仕事をしているので、ラオスとの距離が近くなり、関係が持続しやすくなるような取り組みを支援できたらと思っています。

総会・認定NPOの報告

2014年度通常総会 (2014年9月20日、ライフコミュニティ西馬込)

特定非営利活動法人ラオスのこどもの通常総会は毎年9月に開催しています。今年は活動会員44名（書面表決者20名、委任状6名を含む）と活動協力者4名、計48名が出席しました。



2013年度の事業報告案及び会計報告案、定款変更について承認されました。定款は、近年の活動状況に合わせ、ラオスでの奨学金事業等を盛り込んだ内容に変更されました。

東京都認定NPO

現在、ラオスのこどもは認定NPO法人として国税庁から認定されていますが、管轄が東京都に変更されたため、東京都から認定を受けるべく申請をし、このほど認定されました（認定年月日：平成26年11月26日）。これまでと同様、ご寄付は確定申告をしていただくことで、最大40%還付されます。

表紙の写真

楽しくって、ワクワク。これが基本です。何の？読書活動の基本です。つい図書館というと、静かに、とか、調べもの、ばかりを連想しがちです。ラオスでは歌や、お遊戯は定番。気持ちをリラックスさせて、読み聞かせや紙芝居を楽しみます。本というものに人々が馴染んでこなかったラオスでは、こうした方法で普及を図っています。本が苦手という先生も少なくありません。みんなで歌って楽しむことは、実は先生たちにとっても、本に気持ちを向けるステップでもあるのです。ヴィエンチャンの小学校にて。

特定非営利活動法人 ラオスのこどもの目的は、子どもたちが自らの力を伸ばし、人生を主体的に選択でき、公正で平和な地球社会づくりに貢献することです。教育が十分に普及していない地域のひとつラオスで活動し、ラオスと日本をはじめ子ども、人々の参加を通じて、だれもが成長の機会を得ることをめざします。

ラオスのこども通信 62号

2014年12月発行 編集人：森透
発行：Action with Lao Children / DeknoyLao
(認定) 特定非営利活動法人 ラオスのこども
〒143-0025 東京都大田区南馬込6-29-12 ミキハイツ303
TEL/FAX 03-3755-1603
e-mail: deknolao@yahoo.co.jp
http://deknolao.org
都営地下鉄浅草線 西馬込 南口下車 徒歩7分
郵便振替 00140-6-462494

これからの予定 2015年1月～3月

2015年も活動ミーティングを奇数月、勉強会を偶数月、それぞれ第3土曜日に開催します（一部異なる日もあります）。

<活動ミーティング>

現地報告、国内イベントの打ち合わせ、会の運営の意見交換などを行います。
1/24、3/21

<勉強会>

2/21

テーマ「山のいたずらっ子たちのあそびとしごとと学校～ラオス北部のアカ族の暮らしに学ぶ」

*日程とも変更になる場合があります。内容や会場とあわせ、詳細はホームページでお知らせします。みなさんの参加お待ちしております。



メコンのほとり衣

染色・織り・縫製 ホアイホン職業訓練センター

染色・織り・縫製などの技術習得を通じてラオスの女性の自立を促すことをめざしている「ホアイホン職業訓練センター」の仕事ぶりについてご紹介します。

染色部門は、シルク糸・コットン糸・紙糸を、藍は浸けては乾し、他色は煮染めでは乾しを繰り返して、2、3日から10日くらいかけて自然染色しています。

織り部門は、シルク糸でシン（ラオススカート）やパーピアン（肩掛け・スカーフ）などを織り上げます。縦糸は1本ずつ手で結び、シンの場合は約1日費やします。そしてベースになる紋様をひろい取りながら織り進め、完成まで約1か月。例えば、写真の「紙布帯」の文様（横幅15cm）のパターンを組むのにベテランでも1cm約1時間。シンの幅なら約1日。複雑になると何日もかかります。センターの「紙布」は日本の2014年グッドデザイン賞「メコンデザインセレクション」を受賞しました。

紙布帯



縫製部門ではシルク布や地方からのコットン布などを洋服やバック・ポーチ類小物に仕立てています。

いずれも、ベテラン陣による細かい根気のいる手仕事に頭が下がります。なかには、「難しくて出来な～い」なんて泣きごを漏らす新人もいます。織り子さんたちは、「スムーズに織り始めるまでの準備が嫌。でも、タム・タムと織っているときは楽しい」ですって。

センターでは染め・織りの半日・1日体験。短期・長期の研修も受け付けています。お気軽にお問い合わせを。houeyhong98@gmail.com（日本語可）

Facebookはじめました。「ホアイホン職業訓練センター」と検索して、登録なしで閲覧できます。

（横山真紀子／ホアイホン職業訓練センター）